

児玉 充 教授

商学部

豊富な実務経験で培ったイノベーション研究

異種混合の活発な論議にこそ画期的なアイデアが生まれる



児玉 充(こだま・みつる)

昭和58年早稲田大学理工学部電気工学科卒。60年同大学院電気工学専攻修了。早大博士(工学)。NTT、NTT東日本、NTTドコモを経て、平成15年に本学商学部教授。欧米の主要な学術出版社(palgrave、Edward Elgar、Springer、Imperial College Press、Peter Lang等)や学術誌(LRP、OS、JMS等)に著書や論文を多数発表。岐阜県出身。59歳。

児玉教授の研究テーマである「イノベーションと戦略経営」は、情報通信分野での21年間にわたる豊富な実務経験が基礎になった。当時の花形だった半導体の研究で博士号を取得する一方、電気工学で産業界の頂点である電電公社に就職したのは、公社からNTTに移行したまさにその年。業界にも新時代の波が押し寄せ、新たな情報通信ビジネスに巡り合うことになる。

商品開発プロジェクト

最初に携わったのはWindows 95対応のテレビ会議システム。米国のベンチャー企業と共同開発した日本の第1号だ。今ではスマホで簡単に出来るテレビ会議だが、当時は1台19万8千円もしたという。

その後社内ベンチャーを作って商品開発を進めるなどさまざまなことに挑戦し、NTTドコモに移ってからは携帯電話向けの新しい映像サービスの開発に。プロジェクトリーダーとして、携帯画面を4分割するビデオ会議の開発を3年間



プレゼンや議論のスキルを磨く児玉ゼミ

かけて成功させ、米国のR&D100 Awardを受賞。そうした中で痛感したのが、経済発展の要因であるイノベーションはインベンション(発明)と違うという点。イノベーションは商品化を実現し、世の中に受け入れられて普及するまでを視野に入れなければならない。

45歳で大学教授に転身

本学の商学部教授への転身は45歳の時。研究や論文執筆は昔から好きであり、研究を仕事にしたといったの思いがあった。さらに自身が長年研究してきたことやビジネスの実務で学んだ経験を若い世代に伝えていきたいと考えた。現在でも海外での学術論文や学術書の出版を積極的に続けており、最近では商学部に医学部、薬学部の教授ら6人が学部の枠を超えて結集した「ライフイノベーション」を実現する経営革新モデル

安元 隆子 教授

国際関係学部

ノーベル文学賞作家アレクシエービッチの研究

「大きな歴史」に呑み込まれた「小さき人々」の証言集の文学性 多声的叙述を貫く「人間の尊厳と愛」



安元 隆子(やすもと・たかこ)

本学文理学部国文学科卒。昭和60年立教大学大学院文学研究科日本文学専攻博士前期課程修了。文学修士(立教大)。平成14年名古屋大学大学院国際言語文化研究科日本語文化専攻博士後期課程単位取得満期退学。主な研究テーマは石川啄木、日露交流を描いた文学など。07年、著書『石川啄木とロシア』にて国際文化表現学会賞受賞。静岡県出身。

大学時代は日本文学を専攻し、明治時代の歌人・石川啄木を研究テーマとしてきた安元教授。そこに「ロシア」という新たな研究ワードが加わったきっかけも、やはり啄木だった。啄木が、日露戦争で没したマカロフ提督をしのんで書いた『マカロフ提督追悼の詩』。約20年前のある日、サンクトペテルブルク沖合の軍港の島・クロンシュタットに立つマカロフ提督像に、啄木の詩の一節が刻まれているというニュースが日本に伝わった。

証言が文学に変わる時

この調査を機にロシアと深い関わりを持つようになった安元教授は以降、毎年ゼミの学生を連れてサンクトペテルブルクを訪れ、現地の学生との交流会や意見交換会を開催。国際関係学部の学部祭では、主に日露交流に関するゼミの研究結果を広く三島市民に向けて発信することが恒例となった。昨年はチェルノブイリと福島原子力発電所事故の現在について取り上げている。

「チェルノブイリの祈り」に大いなる感銘を受ける。 「チェルノブイリの事故を科学的に検証した。時系列的に記録したものはたくさんありますが、アレクシエービッチは事故を再現するのではなく、多くの無名の市民たちの証言を集めて、人々があつた事故をどのように受け止め、どのように変わったのかに注目し、チェルノブイリを哲人ナリスの「仕事だ」という声もありますが、私にはそこが確固たる文学性があると感じています」



ゼミ生とサンクトペテルブルクの血の上の教会を背景に

祖国ベラルーシではルカシエンコ大統領の独裁政権下で言論統制が続き、アレクシエービッチは国を離れざるをえない時もあったが、その著作は2015年「多声的な叙述による我々の時代の苦難と勇気の記念碑」として、ノーベル文学賞を受賞した。 「アレクシエービッチを読み解くキーワードは『愛』だと思います。どんな状況下でも希望を失わず『人間』であり続けること。そして、人間の『愛』によって世界をよい方向に導きたいという思いがどの著作にも流れている。このことを多くの人に伝えたいですね」

キーワードは『愛』

彼女の著作に共通して